533

特256
696

政治經濟調査資料

一九三七年ニ於ル

戰爭突發ノ危險性

國民訓練研究所

始

特256
676

一九三七年に於ける
戰爭突發の危險性

現在世界の平和に著しい脅威を與へつゝ問題は各國間に於ける軍備の無限とも思はれる擴張でもなく、それは実に愈々國際的性質を濃厚にしつゝあるスペイン内乱である。

戰い、それは世界大戰に迄發展するであらうか、誰人も答へ得ざる所に吾人はその危險性を感ずるものである。

如何なる原因によりて吾人はかゝる懸念を想起し得るか。

ソヴエート、ドイツ、イタリー、フランス等より政府默認の内に出發する大部隊の戰勇軍はスペインに上陸し各々対立するその陣營に投じ愈々戰爭の惨を展開する、これこそ中立の侵犯、公然たる、

或は又隠然たる干渉である。

政府軍或は反政府軍への武器及食料の供給や各々の國民の個人的同情ばかりでなく実に某國の如きは政府自身が比を行つて居る、内乱の發展と共に歐洲各國の輿論は此点に向ふて進行し國内的に或は國際的に意見の相違は重大なる危機をもたらせ事態は益々尖鋭化する一方である。

最近の報道に於て、國際条約に於て規定された体制にあり且つフランスに多大な利害関係を有するスペイン領モロッコへドイツ軍が上陸した事を載せて居り又スペイン沿海には列國の軍艦が集つまつて何時起るかも知れない新事態に対機してゐる

反政府軍に公然と支援を送るものにドイツ、イタリーがあり且つスペインの合法的政府として正式に承認を與へてゐる、ヒットラーは反軍の闘争をボルシェヴィズムに対する神聖なる戦いと言い、ムッソリーニ首相も之と同様な見解を有してゐる。

我日本帝國も同じ目的の為めに先に日独防共協定を結んだ事は月新しき事実である。

ポルトガルも同一進路を進行しつゝある。

ソヴエートは言ふ迄もなく人民戦線政府軍を支持し比をスペインに於る合法的政府と承認してスペインのカバリエに政府の事実上の首班として活躍しつゝあるソ國大使ローゼンベルグ氏を送つてゐる。マドリード陥落を防止し得たのは実にローゼンベルグ氏の力であると言れてゐる。

イギリス及フランスはその使臣をヴアレンシアに駐劄せしめスペイン内乱を地域化せんとの意圖して居りフランコ将軍を交戦團体とは認めて居らない、フランス國内の共産党一派は政府軍を支持して居るがブルム政府はイギリス同様の政策を以て不干渉維持である。

依然、ロンドン不干渉委員會は全く掛声のみに終って了った、イギリス外相イーデン氏は去る十二月十四日の演説に於て率直に委員會參加國の戰務に怠って居るのを認めて居る、不干渉の法式は極めて融通性を有して居るが、原則に於ては各の承認を得たものである筈実行されたものはなく、國際聯盟も又例の如く拱手傍觀全く為す処はない。

一月十一日、ヒットラーはベルリン駐劄のポンセ佛大使に対してドイツは絶体にスペイン領土に何等の野心あらずと言明したが前述の如くスペイン領モロッコに於るドイツ人の政治的経済的なる活動は事実であり從って欧洲各國の疑念を不安は消失し得ないものである。

現在の処までは重大事件の發生に対しては幾多の平和政策に依って事なきを得て來たが將來に向って同様の保証が果して續行し得る

か冒頭記した如く甚だ疑問であると言はなければならない。

最近のニウスは反政府軍両度マドリードへ進撃し陥落は時期の問題と言はれ、その軍門に降った兵五千は軍法會議の結果全部死刑と言はれて居る、戰爭の悲惨比に過ぎるはない。

「欧洲政局の危期、將來の動向」

ヨーロッパ政局將來の動向は何に依って來るか スペイン内乱を巡って起る水泡の一つが破れんか第二の世界大戰は期して待つ如くに突發するだろう。

そこで吾人は元佛首相タルデュ氏の言を聞かふ『吾人はためらう事なくして、それはドイツありと言ふ。正しくドイツに依存しドイツからのみ來るであらふ。

ドイツこそ自ら熱狂的に準備しつゝある戰爭開始のチャンスを掴

む可時期如何が問題なのだ、ヒツトラー總統はその時期が既に到來したと考へてゐないだろうか、それを裏書する幾つかの理由がある、即ち、ドイツ各紙の論調、ドイツ最近の財政々策、四年に渉る傍若無人の行爲が成功した結果曩成された不遜の念、またヒツトラーがイギリスの再軍備完成を傍觀して居るのはドイツにとつて不利だと爲して居る等々然し他方ドイツが茲一年半位は戰爭開始の準備がない事、參謀本部及外務省筋が早急なる戰爭開始に反対なること又現在ドイツが異狀なる原料難に直面して居る事に想い当ると確信を以て前記の想像を下す訳にも行かないが然しドイツよりの危險を除けば他にその危險を名付く可きものはない」と語つて居るが吾人も此れに同意する。

イタリーも亦エチオピア工作を終つて地中海の現狀維持に関する英伊協定を締結して早々に英國と事を構へるものとは考へられない。

西の戰爭の脅威を考へるならば以上の理由に依つて突發の可能性はスペイン内乱に源を發してそれはドイツに依りて起るであらうと考へるは吾人のみではないであらふ。

伊國のエチオピア工作に依つて伊、英、佛の三國の関係は著しく打撃を受けたが英伊協定が成立し多少其処に柔かな味が生れたが欧洲平和の危險は之等三國間の政治的工作に何等かの重大なる破れが見へた時こそ花火の口火に明らかに点火された時であり、其の口火がドイツで破烈するのでないと誰れが言へようか、

英國航空相ダフ・クーパー氏は本月十二日エデンバラに於て次の如く演説して居る「最も寛容にして楽觀的見解を有する人々と雖もヨーロツパの天地に今や非劇が近付きつゝあるの徴候を見得ない人はあるまい、四億ポンドの國防公債案の檢出は吾々が迫りつゝある危機の中にある事実を遺憾なく明らかにしてゐる、かくの如き危機

にあつてイギリス青年は祖國防衛の爲よろしく正規軍や地方軍團、義勇兵に卒先應募するの覚悟を固めねばならぬ」又エコノミスト誌は英國々防公債案に関する論説中、今後五ケ年間イギリスの經常國防費総額はポーア戰爭に要した全戰費の四倍に達するであらうと説いて居るのは注目に價する、一九四二年までの臨時國防費の総額は実に約百五十三億円の巨額に達するは先述のクーパー空相の演説に照しても同国如何に將來恐る可戰禍を予想し居るかを雄辯に物語るものである。

又一方ドイツの經濟大臣兼中央銀行總裁であるシヤハト氏は例の植民地返還の要求を米國の雜誌「フオーレン・アソエーヤスト」一月號に於て論じて居る。

『米國人はドイツが植民地を有たうが有つまいが米國には何の関係がないことだと思ふかも知れない。併し事実はさうでない。ドイ

ツ七千萬の國民だけならば世界の經濟から分離しても、それは大して世界の繁榮に影響すまいが、東部欧洲の諸國民はドイツに農産物を賣つて生きてゐる。ドイツが沒落すれば欧洲全体の經濟が衰微する。欧洲全体の衰微は米にも影響するだらう。

植民地問題には米國にも責任がある。或る程米國はウエルサイユ條約を批准しなかつた。だがドイツが講和を承諾したのは、米國大統領ウイルソンが提議した講和條約十四ケ條原則を基礎としてであつた。その第五條には植民地の處分に決する場合には政府の公正なる要求と、住民の利益を考量して決するとあつた。大統領の補助者たりしハウス大佐はこの「公正なる要求」といふ言葉に註釋を付けて、ドイツの植民地を處分する場合には、ドイツが熱帯地方産出の原料を必要とすること、その人口のはけ口を必要とすること、平和條約の原則はドイツの敵國は征服したからと云つ

て、ドイツの植民地を取る權利はないことを意味すると云つた。英國も大戰の初めに於てドイツ植民地を取る意志なしと言明した。これは歴史上の事実として無視出來ないと同じく、米國も亦その大統領の宣言を無視することは出來まい。

一九一四年八月廿三日ドイツ政府はその敵國に向つて植民地を戰爭埒外に置くことを提議した。英佛はそれを聞かなかつた。ドイツ植民地全体にある兵は其の數僅かに七千、それは只警察の用に供するのみであつた。ドイツ植民地の土着民の戰爭に動員しなかつた之に反して、フランスは五十万の黒人兵を欧洲の戰場に出した。植民地向類はドイツに採つては純粋に経済上の向類であつて、帝國主義や軍國主義の向類でない。ドイツは植民地を失つた為めに、その工業を維持する為の原料品の缺乏に苦しんでゐる。

欧洲大戰前には世界の貿易が自由で、原料品は何處からでも買へたのである。然るに戰後は、各國共に経済的鎖國主義を取つたが為めに、それが出來ない。世界の貿易は戰前の三分一に縮小した。その上に戰前、ドイツの世界各地に投資した額は約百廿億ドルであつた。その利子で原料品が買へた。この投資は戰爭の結果無償で没收された。從つて原料品を買ふ金がないのである。

世界の國々は有てる國と有たざる國とに分類される。此頃英國上院で或る議員は演説して、英國は有てる國、ドイツ、イタリー日本は有たざる國である。これら三國が不安の状態にあるのは不思議とするに足らない。英國は平和を愛する國だと云はれるが、英國はその慾望に満たされてゐるから平和を愛するのは当然だと云つた。所で、不幸にしてドイツの今の状態は日本やイタリー!と

は比較にならない。日本やイタリーは既に、現状に不満足な國ではない。われわれは有たざる國の列を離れて有つ國の仲間に入つたのである。それ故に、ドイツのみは平和を欲しながら、今尚世界不安の原因となつて居るのだ。併しドイツは平和を愛するが故に、平和的手段で植民地問題を解決し、そして他の國と同じやうに、矢張り有てる國の仲間入りが出來ると希望するのである。

―○―

ドイツが自給自足を理想としてゐるやうにいふものがあるが、それは嘘だ。自給自足は文明の一般原則に反する。それは世界から孤立することになる。商品の交換が減ずれば、知識の交換も減する。科学、藝術、文化を交換する方法がなくなる。自給自足の原則に依つて経済を統制すれば、自然の結果として精神的にも自給自足になる。そして國民の心が狭量になれば、國際関係は険悪

になるばかりだ。人類は今まで知識の交換に依つて進歩して來た。只それに依つてのみ健全な發展が望み得られるのである。

―○―

ドイツが植民地に対して要求することは、原料を生産すること、ドイツの通貨を流通せしめること、此の二ヶ條である。其の他の問題、即ち主權や兵備や警察や法律や國際協力などの問題は討議の結果に一委してもよい。ドイツの植民地要求は帝國主義的の問題でなく、國家の威厳を主とした問題でもなく、只だ純然たる経済問題である。経済問題なるが故に欧洲の平和が一にそれに懸つてゐると云つてもよいと思ふ。以上がシャハト氏の論旨の要點である。

ドイツの持つ主張として吾人は彼の論旨に多大の関心を持つが戰爭への危険は一にかゝつてスペイン内乱を導火線として突發す

るであらうとの予想は決して水泡の如きものではない。

昭和十二年三月十九日印刷納本
昭和十二年三月二十日發行
非賣品

東京市芝区新橋三ノ三二
發行所　國民訓練研究所
東京市芝区新橋三ノ三二
編輯印刷兼發行人　河野信之助

禁轉載

372
277

終